

泣きむちなロックンローラー

10円ガム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ロックが大好きな女の娘と
ロックは嫌いな男の子の話。

目次

第1話。	変わった喋り方。	1
第2話。	えーけえ！けえ！	4
第3話。	私はロツクが大好き！（人、3、*）♪	7

第1話。変わった喋り方。

「泣きむちー泣きむちー！（ゞ（≡皿≡メ）ノ）（）」
彼女は言いました。

.....

「ロックローラーは、人前で泣かんのんぞ！

（*、旦那）ノ!!!」

その子を前に僕は泣き出してしまった。

「皆の前で歌うって言ったのじゃん！

（ゞ（≡皿≡メ）ノ）（）」

ウソつき！。。。（、旦那）ノ。。。」

その子は次の日引越して行った・・・。

あれから、十年間

高校になり新しい日々を迎えた。

僕は小泉、凌（こいずみ、りょう）

平凡な男子高校生だ、

僕は新しい高校生活を満喫していた。

ある日、皆が友達作りでワイワイする中、

一人の女子がイヤホンで曲を聴いていた。

「稲垣さん、何聴いてるの？」

数人の女子が彼女を取り囲み聞いた。

「ブルーハーツ！超かっこいいんゾー！」

変わった喋り方をする彼女だった。

回りも今時ブルーハーツ何て・・・

という反応だった。

「あゝ知っている。リンダリндаとかだよね？」

「歌い出し解るんね？」

「サビしか知らないよゝ」

「皆そうよーるんよね！知ったげに！

聴く？リンダリнда？」

クラスメイトと彼女が答えると

彼女を取り囲んでいた、女子は
いや、いやと去っていた。

彼女の怒ってるいる様な・・・
喋り方や対応が駄目だったのだろう・・・

彼女の名前は、稲垣朱里（いながきあかり）さん。
ぼっち確定だろうな・・・

彼女は耳にイヤホンを当てると、
どぶねずみ、みたいにと、小さく口ずさんでた。

僕はそう思いながら。
授業を受けた。

授業が終わり、クラスメイトがクラス内で
交流を深めようと教卓で言った。

内容はカラオケだ。
男子は全員行くらしい、僕も

いつの間にか参加確定だ。
女子も殆ど参加だ。

女子は女子で交流を深めたり、
イケメンに集まるのだろう。

いきなり、その日は予定やカラオケの部屋や
時間が合わせにくいので、

後日また、授業が短い時にカラオケになった。
僕は仲の良い男子、数人と同じ部屋に入るつもりで

その思わく通りになったが少し
予想外に、僕がいる部屋に稲垣さんが

入って来た。
「私もえーよね？入れてつきやあー！」

断る理由は無く。
皆素直に受け入れた。

僕が、好きな曲を入れて歌った。
チューリップの『サボテンの花』だ

少し古かったが皆知ってて、良い曲！

良い曲！と言ってた。

友達は何カロイドが好きらしく、

別の友達は何ニソンを入れた。

稲垣さんは・・・

リンキンパークの『Numb』という曲だった。

ロックでカッコ良いのは解る。

でも僕は好きじゃない。

後、彼女は女子な事も有り、

声が軽いむしろ、可愛い声だった。

彼女が歌い終わるともっかい、

同じ曲を入れながら。

僕にマイクを渡して来た。

「小泉君、うとーてくれん？」

(うとーて？ああ歌ってかな？でも知らない曲だけど)

「さっき初めて聴いたんだけど・・・」

「えーけえ！うとーて！」

さっきの彼女を聞いた感じで真似をして、

歌った。

友達はハスキーで凄い上手いじゃん！と

絶賛だった！

等の本人は、

「ぶち、よわー！(*、口)ノ!!!」

と部屋を出て行った。

僕は何が何だか解らなかった。

第2話。 えーけえ！けえ！

彼女は部屋を出て行って。

どうやらそのまま帰ったらしい、

会計はどうしたのだろうか？

それからもまだカラオケの時間は有り、

クラスメイトが部屋を入れ替わったりして、

更に友達が増えたし、

色んな人の曲が聴けて良かった。

皆も僕の歌を誉めてくれた。

普段カラオケ何か行かないけど、
良かった。

僕は歌謡曲が好きだし、 J-POPが好きだ。

ロックは嫌い・・・

ロックは前に嫌いになった。

友達と話して帰っていると、

質問された。

「小泉はクラブはどうすんの？」

友達は野球部、卓球部、等決めているらしい

「僕は帰宅部で良いよ。スポーツは苦手だし

文化部の方も駄目だから。」

「そうなんだあゝならさ、合唱部とかは？」

「そうそう、今日聴いた感じ凄い歌上手かった

じゃん、合唱部良いんじゃない？」

「いや、たまたまだよ。得意な曲を入れた

だけだし、文化部も駄目だって

本人がやる気無いから続かないよ。」

「そっか・・・まあ部活無い時は

一緒に帰ったり、寄り道したりして

遊ぼうぜ！」

「うん、僕の方こそよろしく！」

「そう言って僕達は別れて

各々自分の家に帰った。」

(泣きむち！泣きむち (ゞ (≡皿≡メ) ノ)

昔あの子に言われた言葉・・・

「ぶち・よわー！ (*、口、) ノ!!!」

今日稲垣さんに言われた言葉・・・

稲垣さんも変わった喋り方だから、

昔の好きな子を思い出した。

同一人物に思えたが、

苗字が違うし、

稲垣さん程の喋り方では無かった。

あの子が転校した。あの日から

ロツクは嫌いだ・・・

家に帰ったら姉が、『カーペンターズ』

を聴きながら家事を手伝っていた。

夫婦共働きで親が忙しくから、

僕達、姉弟は家の手伝いをよくやっている。

その分お小遣いとかちやんとくれるし、

姉が曲を『山たっちちゃん』に変えた。

ビブラートやしゃくりを使わない。

真っ直ぐ伸ばす歌声。

ポップスでしっかりと濁音や鼻濁音を使い分け

した綺麗な日本語は僕も好きだった。

家事を手伝っていると父が帰って来た。

父は帰って来て、ニュースを見て・・・

それから音楽を流した。

『ザ・ブルーハーツ』

僕は部屋に籠った。

ロツクは嫌い・・・

ロツクは聴きたくない・・・

ロツクを嫌いな自分を嫌い・・・

次の日学校に行く。

稲垣さんはギターケースらしき物を持ってた。

(軽音楽部かな?)

とにかく学校で使う気だろう。

稲垣さんを見ていたら、

目が合い、

此方に近寄って来て・・・

彼女が言った。

「小泉君、放課後、音楽部に来て。」

「えーいきなり!?どうしたの?」

「えーけえー!おなごが、

けえ、よんじやけえ!けえ!(。皿。)

彼女がそう言うのと、席に戻った。

怖い喋り方だった。

(良いから、来い!)

そうゆう感じだろう、

彼女はその後、

別のクラスの女子に、

『ガッキー』と呼ばれて廊下で話してた。

別のクラスには友達がいるみたいだった。

第3話。 私はロックが大好き！（人、 3、*）♪

私は、ロックが大好き！（人、 3、*）♪。
ロックはいつも私のハートに火をつけてくれる。
小さな時からロックだけを聴いてきて来た。
私にとっては神様は『えーちゃん』
だった。

私はロックとあの子が大好き！（人、 3、*）♪
あの子もロックが好きで少し歌ってくれた。
彼は『路上のルール』を少し歌ってくれた。
彼は歌がとても上手で、
ロックンローラーそのものに思えた。
女の私には無い物が有った気がした。
私はあの子を本物のロックンローラーにしたくて、
皆に聴かせてと頼んだ。
あの子は小さく『うん』と言ったが・・・
いざやろうとしたら、泣き出してしまった。
私は、

「泣きむちー泣きむちー！（ゞ（≡皿≡メ）ノ）」
と言って更にあの子を追い詰めてしまった。
大好きなあの子を泣かして、
謝る事も無く引越した。

広島の田舎の方で
ウチの喋り方はその喋り方が身についてしまった。
ウチは、田舎で女子バンドを組み、
ギターを弾いた、
歌も練習したけど・・・
自分の声は嫌い・・・
自分では、声を張り、ハスキーな感じなつもり
だけど・・・聴いたら可愛い声だった。
ウチはロックが大好き！

ギターを掻き鳴らし、

ロックを歌いたい・・・でも

声が・・・

ウチは親の仕事の関係で昔住んでた所の近くに
戻って来た。

高校入ってすぐに、部活とかでバンドメンバー
を探した。

まだバンドらしい事は何も出来てにやあけど、
ヴォーカルにしたい子なら見付けた。

そうあの子が同じ高校におる！

同じクラスにあの子、

小泉君がおる！

でも

ウチの事いっつも覚えとらん！

(ゞ (≧皿≦メ) ノ)

でも昨日、クラスのカラオケで

歌うとーたら、

ロックンローラーでは無かったけど、

声は本物だった。

それより、うとーてと頼んで

皆の前でうとーてくれたのは、

とても嬉しかった。

今日は彼を放課後音楽部に来ると、
誘った。

過去の事を話して、謝って

バンドを組もうゆーてから、

ヴォーカルやらせて (^ω^)

色々話したくて、

きつと小泉君はまだロック好きよね？

私はずつとロックと小泉君が大好き！ (人

3、*) ♪

だから、一緒にバンドを組んで

ロツクをやりたい！

一緒にロツクンローラーになりたい！

早く放課後にならないかな？

授業が終わり放課後になったが、

ベースの子と一緒に

彼を待った・・・

待った・・・

待った・・・

結局一時間以上待ったが

小泉君は来なかった！

「あのくうーそーぼーけーが！

（；。皿。皿）ここうなったら、

あいつの家までいつちやるけえのーや！

（ゞ）≡皿≡メ（ノ）許さん！」